

●全国優秀賞／山形県知事賞●

ぼくのごはんは金メダル

東根市立小田島小学校二年

小山田 瑛太  
おやまだ えいた

コトツとテーブルにおちやわんがおかれ、ほかほかの白ごはんを口いっぱいにはおぼるのが、ぼくは大すぎです。朝のひとくちは、何もかけずに食べます。それは、ごはんをかみしめた時にほのかなあまみをかんじられるからです。そんなごはんをぼくも作ってみたいと思いました。

毎日のごはんは、お母さんやおばあちゃんが、作ってくれます。お母さんのごはんは、少しやわらかめで食べやすいです。おばあちゃんのごはんは、ふつくらもちもちしています。同じお米なのにいろいろなごはんにはんしんしてふしぎです。

「ぼくのごはんは、どんなかんじかな。」  
心の中でワクワクとドキドキがわいわいおどつていきます。

シャツ、シャツ、シャツと、ぼくの手は、ボウルの中のお米をかきまぜながら、リズムよくといていきます。ときおわたたら、水をたっぷりそそいで、お米をきれいにし、その水をすてます。お米が気持ちよく水あそびしているみたいです。すいはんきのおかまに、お米と水を入れてスイッチをオン！少し時間がたってから、ふつふつとごはんのいいにおいがしてきました。いよいよぼくのごはんがかんせいします。

すいはんきからごはんがたけた音楽がなって、ついにその時がきました。すいはんきのふたを開けると、ゆげのなかからつやつやのごはんがぼくを見ていました。ぼくは、しゃもじでごはんをまぜて、おちやわんによそいました。

「ようこそぼくのおちやわんへ。」  
大せいこうです。たきたてほかほかのごはんをかぞくみんなで食べました。みんなとてもおいしいと言ってくれました。ごはんのオリンピックがあつたらぼくは金メダルです。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

がんばれ赤ちゃんなえ!

最上町立向町小学校三年

阿部 市香

わたしは、毎日お米がおいしいなと思いつながら食べています。なぜかという、パパが一生けんめいに作ってくれたお米だからです。

「パパのお米はあまくておいしいな。」

「気持ちがかもっているな。」

そう思うともっとおいしく感じます。また、わたしは五月になるとかならず手伝いをします。わたしが手伝っていることは、たねうえのじゅんびです。その中でもきかいを使ってたねに土をかぶせる作ぎようがとくいです。その作ぎようではトレイが曲がらないようにすばやくやっています。そして手伝った後には、ハウスの中でどんどん葉っぱがのびていく様子を見ながら、

「大きくなつてね赤ちゃんなえ。」

と思つています。

うちでとれたお米は、赤くら温せんスキー場にある「ヒュッテチロル」で使つてもらっています。とくに名物のジンギスカン定食では、どんぶりに山もりのごはんがつかますが、お客さんが、

「お米がとってもあまくておいしいね。」

と言つておかわりしているところを何回も見ました。そこにちようどいたわたしにお店の人から、

「この子のおうちで作っているんですよ。」

とお客さんに伝えてくれました。その時は、とてもうれしい気持ちになりました。

今年は、雪不足で水が足りなかったことと、先日の大雨のえいきようで、大きくなるか心配しています。田んぼの前を通るたびに、

「がんばれ!大きくなつてね。」

とねがっています。そして、お米がとれたらチロルのお客さんのように、大きなどんぶりで食べたいです。

## ●全国優秀賞／山形県知事賞●

### 祖父の思い

大蔵村立大蔵小学校五年

伊藤 莉乃

穂が出ようとしている八月上旬の暑い日、今日も祖父は、水の管理のために田んぼに行きました。

私の家では、祖父と父が米づくりをしています。祖父が中心に進めています。私は毎年、種まきの手伝いをしています。小さい時は、田植えやいねかりにもよくついていきました。でも、最近はスポ少などが忙しくていけません。祖父は、どんなに忙しい日でも、毎日欠かさず朝晩の二回、田んぼに足を運びます。そこでは水の管理をしています。水が少なかったら水を足して、多かったら少なくします。おいしいお米を作りたいから毎日見

守っているそうです。このような祖父の努力のおかげで、私はおいしいお米を食べることができています。

山形県をおそった七月の豪雨。私が住む大蔵村でも、水害がありました。私の家の田んぼも、水につかったり、田んぼの周りがくずれてしまったりと被害がありました。私は、今年の米はもうだめだと思いました。祖父にもその話をするると、「消毒や補修をがんばれば大丈夫だ。」

と力強く話していました。どうやって直すのか聞くと、元の形に土を置いて固めて直すと言っていました。こんなに大変そうな仕事を祖父と父の二人でできるのか心配になりました。一度直してみただけどくずれてしまっていました。でもあきらめずに取り組むすがたはとても勇ましかったです。田んぼがくずれてがっかりしていたけど、元通り

にしたいというあきらめない気持ちが伝わってきた。  
した。

私の家のいねも無事に穂が出ようとしています。  
どんな状況ようでも、自分にできることを最後まで  
でせいっぱいする祖父のすがたから、あきらめな  
いことの大切さを学びました。

最近、祖父はひざの調子が悪く、歩くのが大  
変そうな時があります。たまに弱音を吐くことも  
あるけれど、米づくりが好きでおいしいお米を作  
りたいからがんばれるそうです。この思いだけで、  
五十年以上も米をつくり続けている祖父を私はそ  
んけいしています。そして、家族のためにがんばる  
祖父に感謝の気持ちでいっぱいです。

私が今、祖父のためにできることは、「いただ  
きます」「ごちそうさまでした」をしつかり言うこ  
と、残さずいっぱい食べることです。そして、祖

父のように夢中になれる好きなことを見つけるこ  
とです。

今日も、祖父の思いが詰まったご飯をいっぱい  
食べて、元気に登校します。



## ●山形県農業協同組合中央会会長賞●

### 大切なお米

鶴岡市立朝陽第二小学校六年

佐藤 誠志郎  
さとう せいしろう

僕はお米が大好きです。おにぎりだったら、いくらでも食べることができます。ようち園のころのおやつは、おばあちゃんがにぎってくれたホカホカのたわら型のおにぎりでした。どんなおかしよりもおいしくて、おばあちゃんの優しさがつまった最高の食べ物でした。

ところで、最近さらにお米が好きになるようなできごとがありました。一年に三度もお米を食べることができない期間があったのです。なぜお米を食べることができなかつたかというところ、三度の入院のためです。まず一回目は、のどの手術のた

めの入院でした。その手術の直後は、つばを飲み込むのも痛いぐらいだったので、お米はもちろん、何も食べることができません。手術から二日ぐらいたつて、やっとおかゆを食べることができました。おかゆもおいしかったのですが、やっぱりちようどいいかたさのあのお米が食べたいな、と思いました。そして二回目は「虫垂炎」という病気で、入院することになりました。この時も、何も食べることができなかつた時があり、やっと食べることができたのは柔らかくしたプリンでした。ホカホカの白いご飯が早く食べたくて、なぜこんな病気になつてしまったのだと歯がゆい気持ちでいっぱいでした。そして、その何日か後に、やっと普通のご飯を食べることができました。ふたを開けたときのにおいが今でも思い出せます。一口食べるととてもうれしくて、泣きそうになりました。そして三回目は、

その虫垂炎を治すための手術のときでした。手術が終わってすぐには何も食べることができませんでしたが、三日後に食べることができたおかゆはかなりおいしく、その後によっと食べることでできたお米は、そのさらに上に行くおいしきでした。ご飯を食べることができるようになってからの回復は、不思議ととても早かったような気がします。

この三度の入院経験を通して、お米を食べることのできる素晴らしさやありがたさをあらためて実感することができました。また、健康でいることの大切さや健康でいるからおいしいご飯も食べることができるといふことも実感することができました。

そして、この経験をして思い出したことがあります。ぼくは、ようち園のころ、米作り体験をしたことがあります。そのとき、田植えをするだけ

できえも、泥まみれになって大変だったことを思い出しました。米作りをしている農家の方々の苦労はそんなものではないはずです。大雨や日照りなど天候との戦いもあるでしょう。大変なお仕事なのに、お米を作ってくださっている農家の方には感謝しかありません。そのようにしてできたお米のおいしきをもっと伝えていけたらいいと思います。そして、お米を食べることができると幸せを感じながら、一粒二粒大切に味わって食べたいと思います。



●全国優秀賞／山形県知事賞●

おにぎりと僕

米沢市立第四中学校三年

村田 むらた 慶真 けいしん

ぼくらは やまがた こころのクラブさ  
 さけぼう さけぼう ぼくらはここだ  
 うまれた ときから しぬまでいつしよさ  
 こぶし にぎって このうたをうたう

モンテディオ応援歌 「山形少年」

この歌はモンテディオ山形の応援歌です。

僕はこの歌詞の通り「うまれたときから」家族と一緒にモンテディオ山形の応援に行っています。家族で応援に行き、モンテディオの勝利のために一生懸命応援することはとても楽しいことですが、僕にはもう二つ楽しみがあります。モンテのスタジアムの外には、ブルーキッチンという食べ物売っ

ている所があり、そこには三十以上のいろんなお店があるのです。そこでご飯を食べるのも醍醐味の二つなのです。その中に忘れられない味がありました。それは塩おにぎりです。

僕が思うおにぎりは、中に梅干しや鮭、辛子明太子、すじこなどほかにも色々ありますが僕がビックリしたのはつや姫の塩おにぎりしか売っていないお店があったことです。そこで食べた塩おにぎりがすごくおいしかったので、とても印象に残っています。

モンテのトップパートナーには、つや姫と雪若丸がなっていて選手のユニフォームの背中には、つや姫と雪若丸の名がのっています。山形のおいしいお米が全国に選手と一緒に発信されるなんてすごいと思いました。

最近、モンテの時だけ毎回父が梅と鮭のおにぎりを作ってくれます。最初は母が料理をしていて手を切ってしまう、父におにぎり作りを頼んだことが始まりでした。母の手が治っても作ってくれるようになったらしく今でも、モンテのある日

は、二人で作ってくれています。

今は家を離れている二人の兄におにぎりのことを話すと、とても羨ましがっていました。父のおにぎりは母のよりぎゅつとしていますが、大きくてとてもおいしいです。それも、モンテの時の楽しみです。これがモンテのおにぎりのもう一つのエピソードです。

僕の家はお寺です。僕の家では年に一度山登りをします。この山登りは東吾妻の山開きです。三代前の住職さんが山登りが大好きで霧ノ平という所まで、お地藏様を背負って登り、米沢山の会の人達に手伝ってもらって安置したということから、今でもうちのお寺で毎年ご祈禱しているのです。山開きには市民の人や山の会の人達も参加します。参加する方々は米沢駅から電車で峠駅まで行き、そこから歩きます。村田家はいとこやおじさん、おばさんも行くので、我が家にとって一大イベントです。朝早くから母と祖母がおにぎりをにぎってくれています。そのほかに、きゅうりのみそ漬けなどの定番のおかずを持って車で出発した。

山の登り口に着いたら、ブルーシートを敷いて朝ご飯を食べます。いとこもおかずを持ってきてくれます。そのおかずは毎年同じなのですが、とてもおいしくて、おにぎりと一緒に合ってご飯がすすむのです。そうしているうちに歩いてきた方と合流し、一時間三十分ほどかけて頂上に登り、ご祈禱が行われます。そこで手に少しだけいただく、おごぶのお赤飯がまた格別です。休憩をし、ついさっきご飯を食べたばかりなのに、みんなエネルギーを使ったのでまたおにぎりを食べます。山の頂上からは米沢市内を見下ろすことができ、そこで食べるおにぎりはまた絶品です。「けがをしないで登ってきてね、そして戻ってきてね」「災難よけの梅干しを入れておいたよ」という声を思い出しながら食べました。

このように「おにぎり」一つ一つにも色々な人の思いが詰まっているのだなと思います。

お茶わんのご飯とはまた違ったおにぎりが大好きです。僕も今度はみんなのために、にぎってみたいと思います。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

初めてのバケツ稲

米沢市立第一中学校二年

戸田 寛幸  
とだ ひろゆき

ある日、母が「バケツ稲づくりセット」を農協からもらってきた。僕は、家庭栽培で米が育つなんて到底信じられず、母を「本気だろうか」と疑わしい目で見ている。

四月、母が粃を水につけ出した。僕はちよつと興味が出て、本当にバケツ稲をするのか母に聞いてみた。すると母は、

「もちろん。あなたも手伝いなさいね。」と釘を刺すかのように言われてしまった。母は本当に「本気」らしい。

水につかった粃はによきつと芽を出し、ひげを広げた根も出てきた。そこで、種まきをする事になった。バケツに入れた泥に、指でほんの少し穴を掘り、そこに一粒一粒、種をまいていく。不

器用な僕にはとても難しい作業だった。その日は、全部で三十粒以上の種をまいた。一週間程すると、緑の芽が泥の間から次々と顔を出した。僕は、人間がまだこれしか手を加えていないのに、自分の力だけで生長する、自然の力強さを感じた。

ある日、母が田植えをしようと言った。いよいよだ。バケツで育った稲を四本ずつにまとめて植え直す。これがなかなか難しかった。しつかりまとめて泥に差したはずなのに、手を離すとばらばらになってしまう。悪戦苦闘しながらも、なんとか九株植えることができた。こうして、我が家にコンテナ水田が完成したのだ。気になって調べたところ、今のような田植機が使われ始めたのは、一九六〇年頃のことだった。それまでは、田んぼ何枚分も、しかも毎年、手作業で植えていたことを考えると、先人たちに尊敬と感謝の思いを抱かずにはいられない。それが今日まで受け継がれているのだ。

田植えをしてからの生長は早かった。稲の葉はどんどん大きくなり、根本もどんどん太くなって

いった。あまりの順調な生長ぶりに家族の話題に上ることもしばしばだった。その度に、僕はなんとも言えない照れくさい気持ちになった。难道か自分の分身が褒められたように感じたからだ。

僕の家近所には、田んぼがない。しかし少し住宅街から外れると、田んぼが一面に広がっている。広大な田んぼを見ながら、バケツ稲ですら稲の生長がこんなにも嬉しいのだから、米農家さんは僕以上に、生長した稲を見て、喜んだり、誇らしかったりするのだろう、と思いを馳せる日もあった。

六月下旬、中干し。高校生の兄と、コンテナを傾けて水を捨てた。後はひたすら、大きく育つよう願いながら、穂が出るのを待つ。のんびり屋の母に育てられた稲は、穂が出るのものんびりらしい。九月になった今は、つやつやとした緑色で、背丈はちょうど小さい子どもぐらいで、いつ穂が実るのか楽しみだ。

これから、稲刈り、脱穀など、僕たち家族の米作りは続いていく。それが楽しみで仕方ない。

もちろん、専門の米農家さんと同じことはできないし、作業にかかる苦労は、僕たちのバケツ稲とは桁違いだろう。しかし、きつと、どんなお米でも、作り手が愛情かけて育ててきたお米は、おいしいに違いない。

この初めてのバケツ稲づくりを通して、何より変わったのは、田んぼの見え方だ。一本二本の稲にとてつもない手間暇がかけられていることが分かったからだ。今までは、稲は米になる途中の植物でしかなかった。広大な田んぼに植えられた景色の一部でしかなかった。今は、そこに農家さんの工夫や努力が詰まっている「結晶」のように見えるようになった。稲は農家さんの愛情を一心に受け、今日もすくすくと育っているのだ。

空気もだいぶ秋めいてきた。稲刈りの日が近づいてきている。早く我が家のお米が食べたいと、気持ちをはやる。それと同時に、毎日のお米も美味しく、大切に食べたい。そう思いながら、僕は今日も我が家のバケツで育った稲を眺めている。